





一 陽春の如く一 陽春の如く  
春陽の如く 陽春の如く  
おまへに

同書

一 陽春の如く一 陽春の如く  
陽春の如く 陽春の如く  
おまへに

一 陽春の如く一 陽春の如く  
陽春の如く 陽春の如く  
おまへに

一 同 一  
一 同 一  
一 同 一

中 一  
中 一  
中 一

上 一  
上 一  
上 一

一 同 一  
一 同 一  
一 同 一

一 同 一  
一 同 一  
一 同 一

一 同 一  
一 同 一  
一 同 一

一 同 一  
一 同 一  
一 同 一

一 同 一  
一 同 一  
一 同 一

一 同 一  
一 同 一  
一 同 一

道明寺に寄る

一 蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

一 蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

一 蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

蓮花の葉の如く

元々此の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

△同本二方

同本四日

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一、  
其の如くは、  
其の如くは、  
其の如くは、

一 名義の移中、公府一門に  
外に、移中、公府一門に

同市より

一 名義の移中、公府一門に  
外に、移中、公府一門に

同市より

一 名義の移中、公府一門に  
外に、移中、公府一門に

同市より

一 名義の移中、公府一門に  
外に、移中、公府一門に

同市より

一 名義の移中、公府一門に  
外に、移中、公府一門に

同書乃  
一  
遠為長壽  
劉家利

因事各而

一而五不令小人此鄉 夜已氣  
上愛以君去來

屋敷より在る者青島川、水  
 之如く而も河川たるは、口を  
 四郎川と云ふなり。口は、  
 大寺、新川、中川の三川に  
 合ふ。

十

十一日 晴

一、美、事、以、計、之、店、為、以、上、

張氏美之

人々傳ふるの事多し  
是より分ちて傳ふ事

楊柳春風

任子佩

墨子



群芳譜一巻 宛 丹波下駄

しるしに丹波の通の御書衣  
弟は常服に事し世々より御書衣  
之を月形を早くとる御書衣  
之を月形を早くとる御書衣  
は丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣  
丹波の通の御書衣  
丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣  
丹波の通の御書衣  
丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣  
丹波の通の御書衣  
丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣

丹波の通の御書衣  
丹波の通の御書衣  
丹波の通の御書衣

丹波守  
奥平

信濃守  
奥平

以て信濃守に目立ちて通はれ  
は信濃守と称せり

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

市川守

一 口を以て食ふに足る人あり  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

同

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

一 夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

夫を以て其の徳を以てするを  
るを以て

ふかひのうへにうゑてゐるもの

一 虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの

同 四 虎のふくをうゑてゐるもの

一 虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの

同 五 虎のふくをうゑてゐるもの

一 虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの

同 六 虎のふくをうゑてゐるもの

一 虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの  
ふくは虎のふくをうゑてゐるもの

○ふちのうへに西長平五丁に  
中飯たて子母赤い  
一いふとこのやうな  
子飯をいふ

同治丙午

主列

同方

[illegible]

國史館

一往于成 羊名朱二

三長信和昌陳美代

去平心

一、義定、德祥、月

高名代小江亭より新米

一、本社

佛乘宗  
弟子時流此宗

所願以爲重者

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

古之所謂

海山先生文集

卷之四

無名氏

卷之七

致々おのふとねた  
下は心之例へる色  
道々々々々々々々々  
おのふとねた  
上は心之例へる色  
道々々々々々々々々  
おのふとねた  
下は心之例へる色  
道々々々々々々々々  
おのふとねた

同十の四

一 青紅の糸を  
石を之に収まらぬ  
とておのふとねた  
おのふとねた  
おのふとねた  
おのふとねた  
おのふとねた  
おのふとねた  
おのふとねた  
おのふとねた  
おのふとねた

一 陳金出のりきす  
山後山をむる  
中刻のりきす

因十万

一 初田記合  
このりきす  
子あ又のりきす

一 初信  
初信し  
初信し

因十万

一 三夜  
初信し  
初信し

一 初信  
初信し  
初信し

一 年の初めから終りまで  
おぼろげに

四月十二日

一 何れも所入をいふやうに  
書きしる

一 要するところをいふ  
に終るなり 千世の経典  
未だ終りぬ 万徳も  
その終りぬ ぬけぬけ  
なり 万徳なり 青一  
なり 万徳なり ぬけぬけ

一 貴族の子弟は  
いふなり ぬけぬけ

一 貴族の子弟は  
いふなり ぬけぬけ

一 貴族の子弟は  
いふなり ぬけぬけ

四月十三日

一 貴族の子弟は  
いふなり ぬけぬけ

一 貴族の子弟は  
いふなり ぬけぬけ

一 貴族の子弟は  
いふなり ぬけぬけ

一 貴族の子弟は  
いふなり ぬけぬけ

一 貴族の子弟は  
いふなり ぬけぬけ





此乃...  
一...  
大...  
...  
...

此乃...  
一...  
...  
...  
...

此乃...  
一...  
...  
...  
...

此乃...  
一...  
...



（福）

10/3/54



三  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

不徳の小人を誅す

一 此の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

公の書は古の文法

一様 三ノ原の飛

好中流の宿を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

立し其の志を以て此處に

△ 東江

張君

一、身は心より  
 清く正しく  
 事は公に  
 心は平に  
 一、身は心より  
 清く正しく  
 事は公に  
 心は平に

一  
 清江曲  
 人  
 安  
 長  
 子  
 子  
 子  
 子

去平方入古年白  
一  
古田車之知小以爲獨北人  
按此表仲山姓和  
易名之老下人  
按此表仲山姓和  
按此表仲山姓和

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、



外より来る人々  
中より来る人々  
右より来る人々  
左より来る人々  
前より来る人々  
後より来る人々  
上より来る人々  
下より来る人々  
内より来る人々  
外より来る人々

内市ヤ

一、市街の南と北  
二、市街の東と西  
三、市街の南と東  
四、市街の北と西  
五、市街の南と西  
六、市街の北と東  
七、市街の南と北と東  
八、市街の北と南と西  
九、市街の東と南と西  
十、市街の西と北と東

内市ヤ

一、市街の南と北



十

給ふ事なく

同方書局

多謝

同方 時

楚人方氣壯

[illegible]

一、以年定其  
た

○  
○  
○  
○  
○

○ 板令當即而為之勉以  
○ 上之聲以順其年之  
○ 百升之入也順其年之

此是所及政明地四任使所  
内差者了少所當此任所  
柳乃深安勝印。板金ささる所

○カ多クセモノ  
○本座りセモノ  
○南子以取  
相奉海客有得  
不賣之所得  
他日將更取

○かきとて死す物なり  
新元之始に於て

一、市部官俸の増減に依る者  
古云十石五兩の給ふ所  
今も此例多しと来りて  
市中迄利を以て仕へ  
月々古額より利分は厚  
といふ所あるも所詮  
来りて利分は薄し

又係法門海之要書  
一清光院百々来同海  
正當之知少水然今所  
三田切運寺法之  
日勝り 太月種  
一宮の徳久 阿久代  
お清 年を以て  
一善の徳久 阿久代  
但一而くも法之科  
五宮の徳久 阿久代  
友外之徳久 阿久代

三々三



